資料６

先進地視察について

分類 まち ⑦多様な主体の社会参画　取組期間 平成23年～　団体名 大竹市　所属 生涯学習課　まち

取組事例名 「学びのカフェ」物語 ～ひとが変わりまちが変わる～

連絡先 玖波公民館　☎0827-57-7084　kubakominkan@fch.ne.jp　連携・協力団体等 小学校，中学校，地域団体，企業等

取組の概要　公民館自主事業「学びのカフェ」から「地域ジン」誕生

公民館自主事業の改革のため４年前から参加交流型学習を取り入れた「学びのカフェ」をスタートした。地域住民同士のつながりを構築し，３年目にはさらに地域課題を住民と共に学び考え，その解決に向けた事業「地域ジン学びのカフェ」に発展させた。この取組により，地域住民がまちを元気にすることに意欲的となり「地域ジンまちカフェプロジェクト」が誕生。地元の中学生も巻き込み，地域丸ごとイベント「まちカフェ」開催へ進んだ。このプロジェクトは，公民館職員とともに地域ジン（学びのカフェを受講した地域住民）が集まり，事業企画・実施・評価・改善を行っており，「持続的・継続的」なＰＤＣＡサイクルを実現している。地域住民を主体としたまちづくりがなされ，地域の活性化・情報発信・絆づくりの拠点が構築された。「地域ジン」の活動は今後もさらに発展的な事業に向けて進行中である。

取組の背景　地域住民のつながりが薄い・・公民館が貸館状態・・マンネリ化・・・

玖波は大竹市の東に位置し，昔は西国街道の宿場町として栄え，白漆喰の壁や格子の美しい街並みが現在もなお残っている歴史と癒しのまちである。しかしながら地域内でも知らない若者も多い。
地域には小学校と中学校が１校ずつ存在するが，独居高齢者や空き家が多く，商店街に空き店舗が目立つとともに，地域住民同士の繋がりも薄いなどの多くの課題があった。また，玖波公民館は設立40年を迎え老朽化が進み，新規の来館者も少なく固定客ばかりで，自主事業も趣味趣向のものが多くマンネリ化していた。

取組のねらい　公民館をイメージチェンジ！地域と学校と公民館をつなぐ・協働のまちづくり

マンネリ化していた公民館のイメージアップを図るため，「おしゃれな学び空間」を創り，ふるさとを愛する心を育て（特に次世代を担う若者），玖波の地域資源（歴史・文化・人材など）を活かす取組を行う。学校・地域・公民館を繋ぎ，協働でまちづくりを行う。

取組の具体的内容　「学びのカフェ」から「地域ジン学びのカフェ」へ

1「学びのカフェ」スタート（平成23年）
　参加者が一緒になって知性と感性とを共有する交流の場を提供
　(1) 地域住民の意識を変える参加型交流
　(2) 地域住民が交流できる時間＆空間「カフェタイム」を設ける
　(3) 歴史・文化・人材などの地域資源の発掘
　(4) タイムリーな題材
　(5) フェイスブック・ブログの活用
2「地域ジン学びのカフェ」にバージョンアップ（平成25年）
　「学びのカフェ」を２年継続して行った結果，受講者が次第に増加
　ふれあい交流を通して参加者が仲間意識を持つようになり，毎月の「学びのカフェ」が定着していった。お互いを「地域ジン」と呼び合い，自発的に毎月の講座の演台幕を手作り，自分たちの名刺やユニフォーム（オリジナルＴシャツ），幟，学びのカフェのテーマソングＣＤを作るなど活動が積極的になっていった。
3「地域ジン学びのカフェまちカフェプロジェクト」誕生
　「見知らんガイドマップ＆グルメスタンプラリー」，「古民家まちカフェ」，「まちの資料館」，「くばコレ」などの地域イベントを企画・開催

取組に当たっての課題・問題点　一人では動けない

地域を変える手段として，参加者が主体性を持つための意識改革や次代を担う若い人も巻き込むための方策を少ない職員（常駐１人）と少ない予算の中で考え，実施する必要があった。

創意工夫した点　地域の「地域ジン」とともに。目指せ多世代交流！

1　事業におけるネットワークの構築，協力・連携団体を増やしてきた。玖波まちづくり振興会（玖波マルシェ）との連携を図り共催。イベントスタッフとして地元企業，地元信用金庫が応援参加するに至っている。
2　フェイスブックやブログを利用し，積極的に情報発信に取り組んできた。
3　地域・公民館だけでなく学校も連携し，多世代交流による，地域まるごと巻き込みイベントにしていった。

取組の成果（効果）　ひとが変わりまちが変わった！まちが輝いた！

1　「おしゃれな学び空間」の提供により参加者が激増
2　働く人や若者など，今まで来館した事がない新規参加者が増加
3　団塊世代の人の「地域デビュー」の場となった。
4　住民同士の絆づくりの場となった。
5　中学生が自らプロジェクトに加わり，共に事業を開催した事など多世代間交流ができた。
6　学校・地域・公民館の連携がうまく取れるようになった。
7　４年間継続して事業を開催したことにより，多くの参加者が「地域ジン」としての自覚を持ち継続して事業に参加し，地域の課題に取り組むようになった。
8　フェイスブックやブログにより最新の情報をリアルタイムに発信できるようになった。
9　障害を持つ人も参加できるよう要約筆記を，子育て中の人には託児を行える体制を整えた。
10　地域資源を活用した事業の開催は，ふるさとを愛する心を育て，次世代を担う人材の育成に繋がる取組となった。
11　商店街の空き店舗や古民家などを活かして地域の活性化に繋げることができた。
12　参加者と共に学びのＰＤＣＡサイクルを構築し，住民主体のまちづくりが動き始めている。

今後の展開　コミュニティのエリア拡大へ

1　今後とも「地域ジン学びのカフェ」を継続して開催し，さらに地域におけるコミュニティのエリアを拡大し，公民館を核としたまちづくり，まちおこしが活発に行われるよう常に住民と共にＰＤＣＡサイクルの機能を働かせていく。
2　引き続きふるさとを愛する心の育成や地域を担う人材の育成に取り組み，さらに多くの人材を育成し，地域全体を巻き込んであらゆる地域課題を見つけ，解決に向けて取り組んでいく。
3　「公民館はコーディネーター」の姿勢を貫き，地域の活性化・情報発信・絆づくりの拠点として在り続けていく。

他団体へのアドバイス　人が輝けば，地域も輝く！　まちづくりはひと！

1「まち」を変えるのは「人」：「人」が変われば「まち」が変わっていく。「主役は地域住民」
2　地域資源発掘：自分の住んでいるまちに対して，みんなが誇りを持ち，自信を持つ。どんな地域でも，ふるさとに眠っている宝物（歴史，文化，人材）がたくさんあるので，地元の宝さがしを行うことで，まちが元気になりまちが輝いていく。
3　継続：すぐに結果を求めず，諦めない。決してブレないスタンスで，地域住民とともに歩んでいく。

大野学園が出来るまでの流れ

【平成２２年６月】
プロポーザルによる設計業者選定

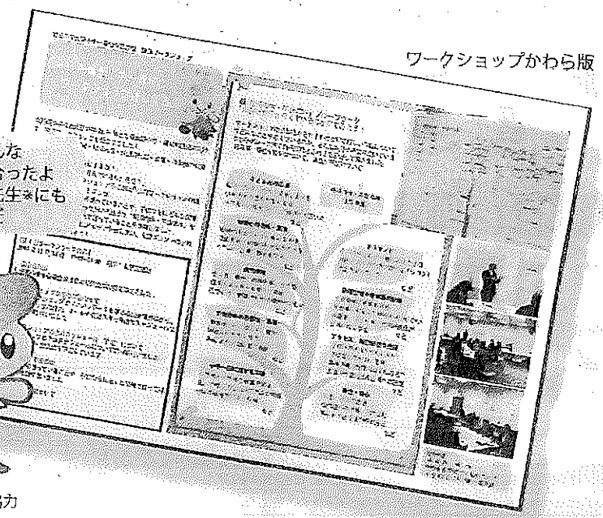
【平成２２年６月～平成２３年６月】
基本設計
学校・地域・保護者等によるワークショップを開催

【平成２３年７月～平成２４年１１月】
実施設計

【平成２５年１月】
校舎工事着手

【平成２６年６月】
校舎竣工

【平成２８年３月】
武道場部室棟竣工



ワークショップかわら版

ワークショップでどんな
学校にしたいか話し合ったよ
学校計画の専門家の先生※にも
協力してもらったんだ

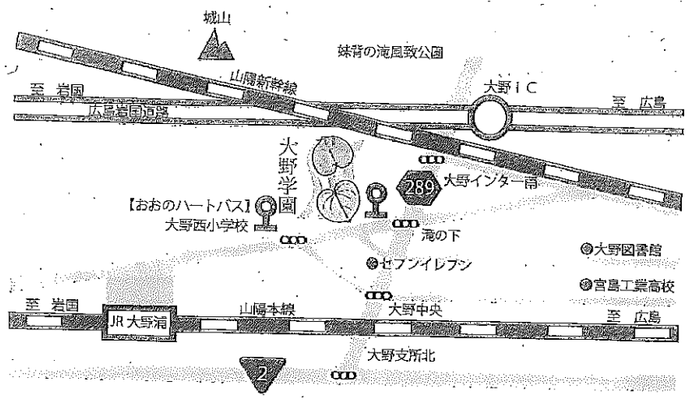
※計画・ワークショップ協力
千葉大学　柳澤要教授
呉工業高等専門学校　下倉玲子先生

大野学園の校舎には
子ども達の協力で
出来たものが色々あるよ

【名前（愛称）とシンボルマーク】

「大野学園」という愛称とシンボルマークは、廿日市市が
一般公募で決定。

シンボルマークの背景は大野で有名な「妹背の滝」を、
２枚の葉は大野の木ともいえる「ベニマンサク」を表している。

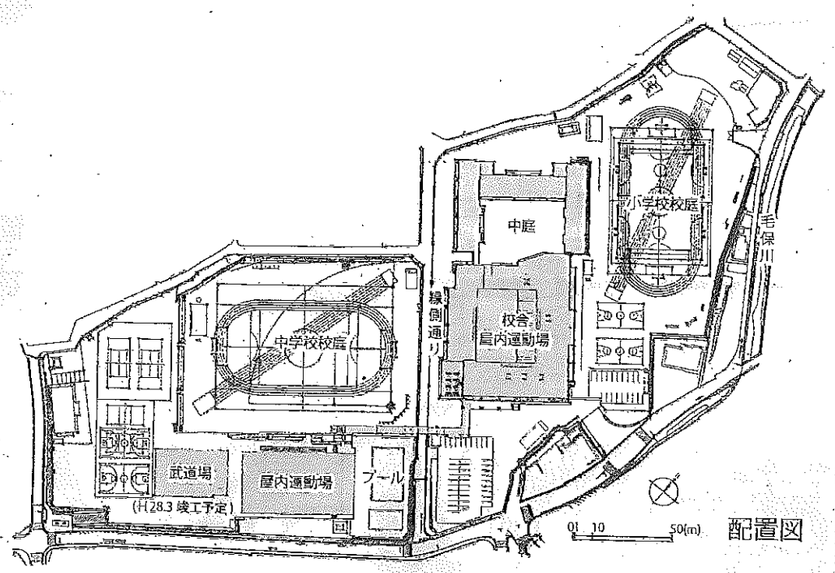


アクセスマップ

大野学園　〒739-0441　広島県廿日市市大野原四丁目２番60号

廿日市市立大野西小学校
TEL　0829-55-2013
FAX　0829-54-0472
E-Mail ononishi-e-soshiki
@hatsukaichi-edu.jp

廿日市市立大野中学校
TEL　0829-55-2015
FAX　0829-54-0475
E-Mail ono-j-soshiki
@hatsukaichi-edu.jp



配置図

【概要】

○敷地面積　：45,563.42 ㎡
　校舎敷地　：24,749.53 ㎡
　運動場敷地：20,813.89 ㎡

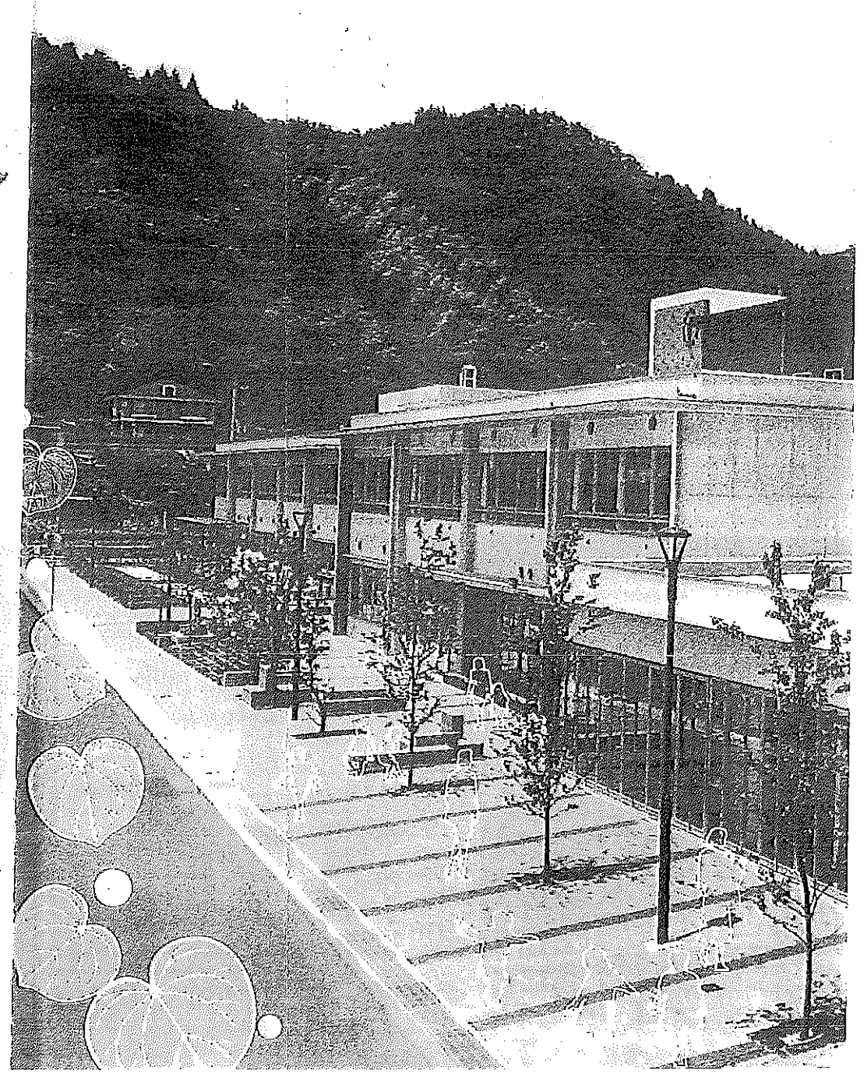
○構　　造：鉄筋コンクリート造３階建
○延床面積　：校舎　12,876.18 ㎡
○校舎棟建設工事費：約 22 億７千万円

・基本設計・実施設計・監理	株式会社　日総建
・建築工事	戸田建設・有田建設 共同企業体
・電気設備工事	九電工・三喜産業 共同企業体
・機械設備工事	日比谷総合設備・竹内 特定建設工事共同企業体

小中一貫教育推進校

大野学園

廿日市市立大野西小学校
廿日市市立大野中学校



大野学園

地域のつながりを継承する
9学年一体の家

大野西小と大野中は、もともと敷地が隣接し従前より結びつきが強い。地域住民と学校の関わりも深い。この校舎は、こうした恵まれた環境を生かし、小・中・地域の交流・連携を継承・促進していくことを目指した「9学年一体の家」です。

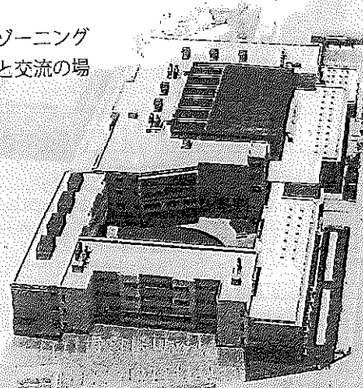
<配置計画>小中それぞれの庭とまちの縁側

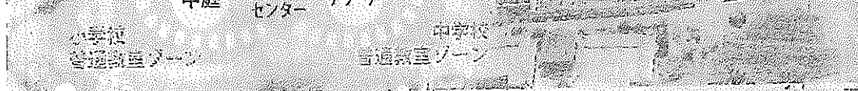
校舎を挟んで小学校用・中学校用それぞれの校庭を確保することで、安全性への配慮と年齢・体格差に合った運動スペースの確保を実現。２つの敷地はブリッジによる「学校通り」でつなぐ。敷地中央の市道周辺は、地域に開かれた公開空地「縁側通り」として整備し、学校と地域のふれあいの場を創出している。

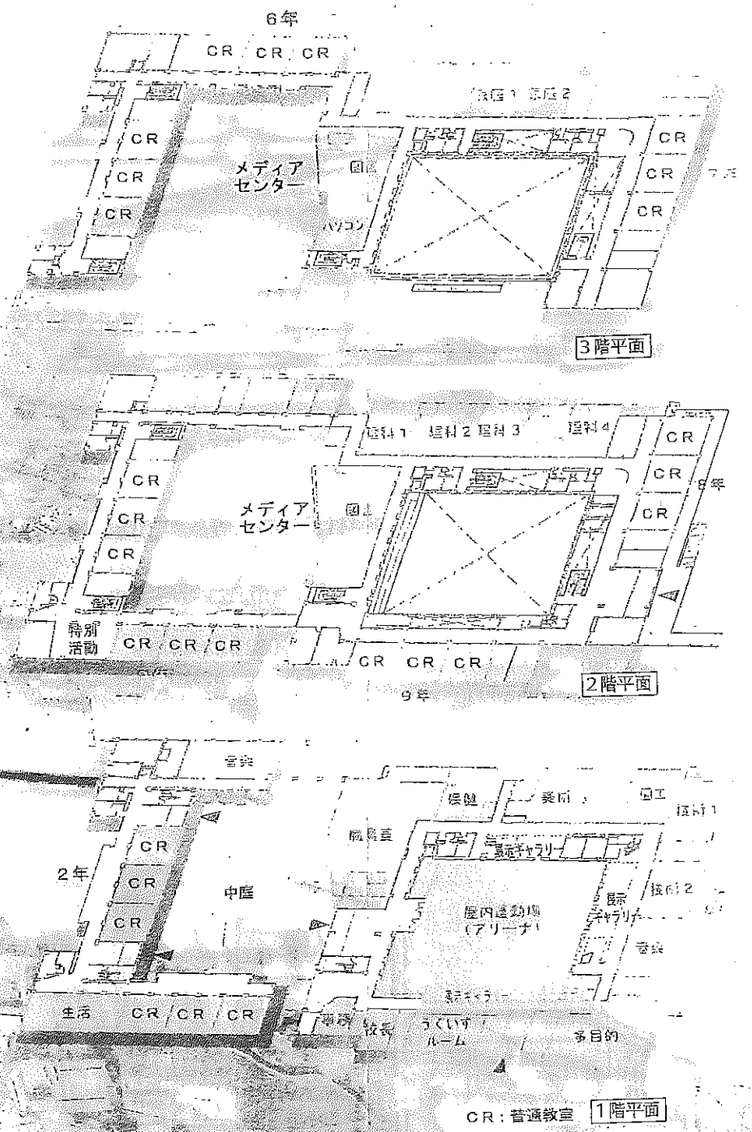
<平面計画>施設一体型のメリットを活かす

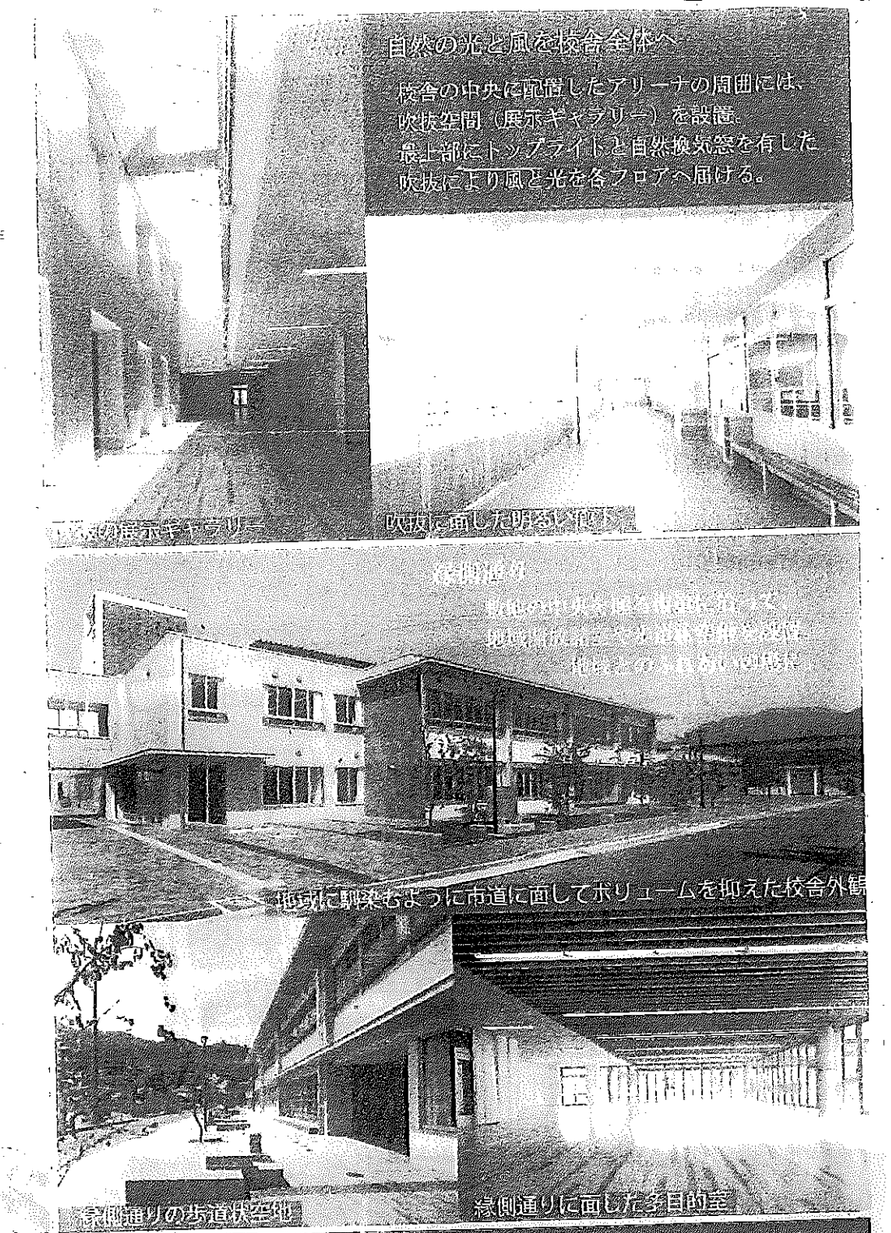
体格差に配慮して年齢ごとにまとまりのあるゾーニングを形成しつつも、校舎全体をつなぐ回遊動線と交流の場づくりにより、自然な交流と一体感を育む。

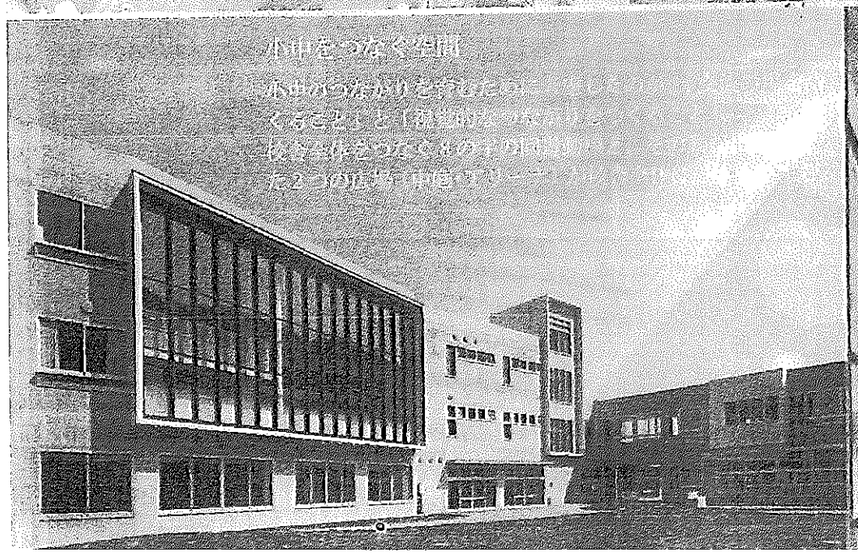
- 学年毎のまとまりを確保した教室配置
- 中庭とアリーナの２つの広場と回遊動線
- 交流拠点となるメディアセンター
- 小中一体の職員室
- 連携を考慮した特別教室のゾーニング







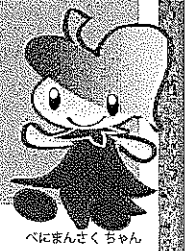




廿日市市大野小中一貫教育推進校　整備ワークショップ

かわら版 vol.2

小中一貫校の「学校環境」って？？



「最近の学校施設ってどうなっているんだろう？？」
今回は学校建築に関する専門家である柳澤 要先生に最新の学校事例を紹介していただきました！

小中学校が一体となった学校、様々な学習・交流スペースの事例、地域に開かれた学校、地域施設と一体となった学校などなど…たくさんの事例を写真や図面で見せていただきました。
講演後のディスカッションでは地域と学校がどう関わっていったら良いか、様々な意見が交わされました。
自分が通っていた学校との違いを振り返ったり、新しい学校のイメージを膨らませる良い機会になったと思います。

今回教えて頂いたことを新しい学校づくりに活かしていきましょう！

【座談会　内容】
2011年1月22日　14:00~16:00　場所：大野図書館

◇開会の挨拶
廿日市市教育委員会教育部長より開会の挨拶を頂きました。

◇講演「これからの学校計画の課題と実践」
柳澤先生から国内外の様々な学校事例を紹介して頂きました。

◇ディスカッション
柳澤先生を交えて、学校施設・学校環境についてのディスカッションを行いました。
学校と地域の関わり方について、様々な質問や意見が挙がりました。

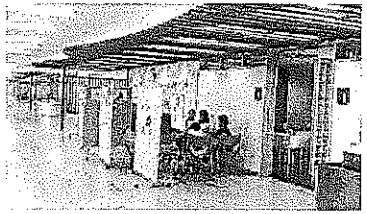
◇次回の予定等について

柳澤 要先生
千葉大学大学院工学研究科准教授
専門分野：建築デザイン、建築計画、
環境行動デザイン、教育施設計画、
ユニバーサルデザイン

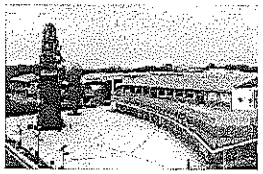
■講演「これからの学校計画の課題と実践」
講師　柳澤 要　准教授（千葉大学大学院工学研究科）

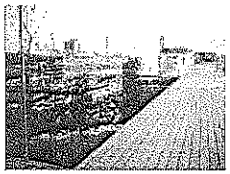
※写真は柳澤先生の講演内容から抜粋

○小中一貫教育のねらいと施設・スペース
○テーマ１：児童・生徒の能力や個性の伸長
○テーマ２：コミュニケーションの機会の増大
○テーマ３：地域との連携推進
○テーマ４：教職員の連携・協働
○テーマ５：人や環境にやさしいエコな学校


■グループ学習とオープンスペース内のコーナー

■小学生と中学生の交流スペース


■地域に開かれた広場


■屋上に設置されたビオトープ

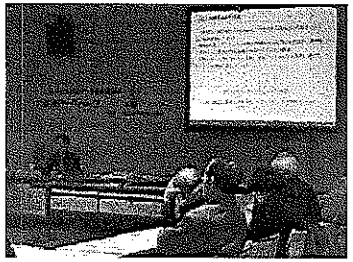
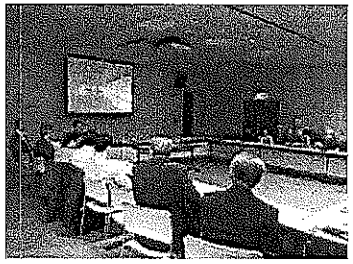
■ディスカッション　（敬称略）

（参加者）地域と学校の関わり方を議論していくうえで、進め方のヒントになる事例はありますか？
（柳澤）　地域開放の管理を地域住民で行っている事例があり、その事例では地域住民が率先して運営協議会をつくって建設後も継続して学校と議論をしています。

（参加者）どうしたら開放と安全を両立できるでしょうか？
（柳澤）　どんなにセキュリティを強化しても、侵入しようと思えばできます。
逆にセキュリティを強化することで地域と学校の距離が遠くなってしまう。
外から子ども達の姿が見えること、地域ルームなどの地域住民が集まれる場所をつくることで、地域の抑止力を働かせるのが効果的だと思います。

（参加者）騒音などの近隣住民への配慮はどのように行っている事例がありますか？
（柳澤）　体育館や音楽室を地域に向けないなどの配置計画で対応しています。
また、隣接する住宅の住民に計画説明・協議したこともあります。

（参加者）学校が生涯学習と一体になって、障がい者への配慮や書道などの教室もあるといいと思います。
（柳澤）　小中が一体になることでお互いのスペースが共有でき、学校にとっても地域にとっても活動の幅が増えるようになるといいですね。

（参加者）子どもと親の気持ちを汲む方法の事例はありますか？
（柳澤）　今回のようなワークショップのように地域住民・保護者に意見を募ったり、子どもからアイデアを募る機会を作るなどの事例※があります。

※この事例を参考に、今回の基本設計では大野西小、大野中の児童生徒から「学校の好きなところ、きらいなところ」の意見を聞き、設計に反映させることにしています。